

2012年6月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

理想への道

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「授記品」

1. 授記品の概要

釈迦牟尼世尊が、4人の大弟子に授記します。

4人の大弟子は、ま か か し ょ う摩訶迦葉・ま か も っ け ん れ ん摩訶目犍連・し ゅ ぼ だ い須菩提・ま か か せ ん ね ん摩訶迦旃延です。

2. 記別

(1) 保証

「記」には、「おぼえる」とか「しるしをつける」という意味があります。仏教では仏が弟子たちに「あなたは将来必ず仏の境地に達します」と保証を与えることです。

記はひとつひとつ別けて与えるので「記別」と言います。

仏さまが弟子たちに記を授けるのが「授記」、弟子たちが仏さまから記を受けるのが「受記」です。

(2) 記別の条件

① 記別は無条件に与えられるのではありません。必ず条件がつきます。それは「これこれの修業をしたのちに」ということです。

それゆえ、授記は「仏になる大学への入学許可書」と言われます。

② 記別の条件

記別の条件となる修業は二つあります。

修業1：数えきれないほど多くの仏さまにお会いして、帰依と感謝のまごころをささげること。これは、真理の道を学びながら、自分の人格を高める修業を、心を込めて継続することです。

修業2：仏さまの教えを多くの人々にのべ伝え真理の道に引き入れる努力を、心を込めて継続すること。

③ 二つの修業はひとつ

「多くの人々を仏さまが説いてくださる真理の道に引き入れる努力をすること」が「仏さまに帰依と感謝のまごころをささげること」にほかなりません。二つの修業は、実はひとつです。

(3) 記別を受ける人々

記別を受ける人々は、少なくとも、釈迦牟尼世尊の教えすなわち真理の教えに触れている人々またはこれから触れる人々です。

真理の道を知らなければ、真理の道を歩けないから、条件を満たすことができません。

3. 記別の意義

(1) 未来達成形の目的

記別によって、将来「理想の人間になる」という未来達成形の目的が確立します。

(2) 常時達成形の目的

記別によって「自ら真理を歩みつつ、人々を真理の道に導き入れる努力をする」という、常時達成形の目的が確立します。

(3) 人間の真の生き方

記別によって、常に、人々と共に、理想に向かって努力し続けるのが、人間としての真の生き方であることが明らかになります。

4. 4人の仏弟子に対する授記

(1) 摩訶迦葉に授記する

わたし（釈迦牟尼世尊）の弟子であるこの摩訶迦葉は、これからさきたくさんの仏に会いたてまつり、帰依と感謝のまことをささげ、心から敬い、あがめたつとび、徳をたたえ、そのはかりしれないほどの偉大な教えをひろく世につたえることができます。そして、最後に仏となることができるでしょう。（庭野日敬著『新釈法華三部経4』／p.125）

(2) 仏弟子たちへの授記

引き続き、須菩提、摩訶迦旃延、摩訶目犍連に授記します。こののち、次々と仏弟子たちに授記がなされます。（6ページの「授記される仏弟子たち」を参照してください）

5. 理想社会

釈迦牟尼世尊の授記の言葉の中に、成仏したときの国の様子が描かれています。妙法蓮華経を編纂した人々が思い描いた理想的な社会が描写されているのだと思われます。

(1) 土地の様子

国土がひじょうに美しくて、いろいろな汚(けが)れやみにくいものがなく、ゴロゴロした石ころやいばらのようなものもありません。人間の大小便もたくみに処理されて、きたないものはありません。土地は平らで、でこぼこや、穴や、じゃまになる高みなどはありません。道は瑠璃で舗装され、りっぱな並木がたちならび、黄金の縄で道の境界を縁どり、いろいろな美しい花が天から降ってきて、どこもかしこも清らかで美しい景色です。（庭野日敬著『新釈法華三部経4』／p128～129）

現代の科学技術を駆使すれば、このような国土を実現するのは不可能ではないと思います。

しかし現代は、個人レベルから国家レベルまでの環境汚染の行動が、国土を汚しています。

(2) 人の様子

その国には、仏の教えを実践し、それを説きひろめる人が無数におり、また仏の教えを学ぶ人も無数にいます。魔事すなわち仏の教えをさまたげるようなことも起こらず、魔やその仲間がいても、この国ではかえって仏の教えを護る役目をするのです。(同/p129~130)

「人」については、現代は、このような理想からかけ離れていると言わざるを得ません。魔事は起こり、魔やその仲間が跳梁して、人の心を乱しています。

6. 修業の三要素

(1) 繰り返される経文

授記品では、摩訶迦葉、須菩提、摩訶迦旃延、摩訶目犍連の4人が授記されます。このため、同じような経文が4回繰り返されます。

仏教経典では、同じようなことが繰り返されることがよくあります。これは、繰り返しの大切さを物語っていると考えられます。

(2) 修業は繰り返しが大切

修業の上では、繰り返すということがとても大切です。「したことはしやすくなる」という人間の性質によって、同じことを何度でも何度でも、心を集中して繰り返すことによって、ほんとうに身につけることができるからです。

(3) 修業の三要素

修業の三要素として、次のように言われることもあります。

「よいことを、こころをこめて、くりかえす」

7. 悪の繰り返しの恐ろしさ

(1) 悪にどっぷり漬かる

悪の行為を繰り返しますと、悪い行為をすることが当たり前になり、悪いことをしているという意識も無くなってしまいます。このため、善の道に戻ることが困難になります。いわゆる、悪にどっぷり漬かったという状態です。

(2) 善に立ち戻る

悪に染まりきった人でも、根は仏性ですから、善の道に立ち戻る可能性はあります。

悪の世界を長い間さまよったあげくに善へ目を向けるようになり、次第に修業を積んで、人々のために貢献するようになった。そのようなことが、経文にも記されています。また、そのような実例もあります。

8. 魔・魔事

理想世界の人の様子のところ「魔事すなわち仏の教えをさまたげるようなことも起こらず、魔やその仲間がいても、この国ではかえって仏の教えを護る役目をするのです」とありました。

(1) 「魔」とは

正しい道の邪魔をするものすべてをひっくるめて「魔」といいます。「魔事」は、魔が起こすものごとです。

(2) 身内の魔

- ① われわれの潜在意識に巣くっている迷いの集積や、正しい心をかき乱そうとする衝動や、邪な思いなどを、身内の魔といいます。
- ② 心の底から仏の教えを求め、ほんとうに教えを実践する人々は、ときどき身内の魔がはたらいてもこれに負けることなく、自分はまだまだ未熟だと反省して道を求める志をつよめるはたらきをするものです。結果として、身内の魔が仏法を護ることになります。

(3) 身外の魔

- ① 仏法を身に行う人や、それを広めようとする人に対して、誘惑・非難・脅迫をくわえようとする人たちの行為や言論の力です。
- ② 「悪につよきは善にもつよい」といいますが、このような人々がひとたび仏法を理解し実践するようになりますと、人間がガラリと変わり、仏法を護るようになることがあります。

(4) 魔に対する態度

- ① 魔という暴力に対して、暴力をもって立ちむかってみても、けっして消滅させることはできません。
- ② 魔に打ち勝つものは正法しかありません。真理にかなった正しい道を歩むことによってのみ、魔に打ち勝つことができるのです。

(5) 人生と魔

人生途上には、数多くの魔が現れます。いつ、どのような魔が現れても、正しい態度で向き合い、打ち勝ち、正しく歩み続けたいものだと思います。

【参考】 仏の十号

仏さまは、さまざまな呼び方をされています。「仏(ほとけ)」という呼び方も「仏陀(buddha)」の和名です。仏さまの十種の呼び名を「仏の十号」と言います。

にょらい 如来	真如から来たという意味で、真如の体現者。「真如」とは「ありのまま」という意味。真の人間としてのありのままの姿をし、ありのままの生き方をしている人が如来。
おうぐ 応供	供養を受けるに相応しい人。あらゆる意味で尊敬を受けるに値する人。
しょうへんち 正遍知	この世のあらゆるものごとにあまねくゆきわたる正しい智慧(阿耨多羅三藐三菩提)を具えた人。
みょうぎょうそく 明行足	智慧(明)と実践(行)が満ち足りている人。
ぜんぜい 善逝	善く逝った人。迷いを完全にのぞきさってしまったという意味。
せけんげ 世間解	すべての人がそれぞれちがった境遇(世間)を背負っているのを、はっきり見分ける(解)ことのできる知力の持主。
むじょうじ 無上士	この上もない立派な人。無上の人格を成就した人。
じょうごじょうぶ 調御丈夫	上手な調教師が象や馬をよく馴らすようにどんな人をもおもうままに教え導くことのできる人。
てんにんし 天人師	天上界の人々(天)、人間界の人々(人)の大導師。
ぶつ 仏	仏陀。悟った人。
せそん 世尊	世の中で尊重される人。

実際には全部で十一あります。「仏世尊」でひとつとする考え方、「世尊」は別とする考え方などがあります。これらの呼び名は、私たちが修業の目標とするべき境地であると受け取ることもできます。

【参考】授記される仏弟子たち

品	仏弟子	仏としての名	成仏までの修業
譬諭品	しゃりほつ 舍利弗	けこうによらい 華光如来	若干千万億の仏を供養云々
授記品	ま か かしょう 摩訶迦葉	こうみょうによらい 光明 如来	三百万億の諸仏を奉観云々
	しゅ ぼ だい 須菩提	みょうそうによらい 名 相如来	三百万億那由他の仏を奉観云々
	ま か か せんねん 摩訶迦旃延	えん ぶ ないこんこうによらい 閻浮那提金光如来	八千億の仏に供養し奉事云々
	ま か もっけんれん 摩訶目犍連	た ま ら ぼつせんだんこうによらい 多摩羅跋栴檀香如来	八千の諸仏に供養し云々
五百弟子受記品	ふる な 富楼那	ほうみょうによらい 法明 如来	無量無辺の諸仏の法を護持し云々
	あらかん 五百人の阿羅漢 この会に在らざる者	ふみょうによらい 普明如来	六万二千億の仏を供養し云々
授学無学人記品	あなん 阿難	せんかい え じ ざいつうおうによらい 山海慧自在通王如来	六十二億の諸仏を供養し云々
	ら ごら 羅睺羅	とうしっぽう け によら 蹈七宝華如来	十世界微塵等数の諸仏如来を供養云々
	がく む がく 学・無学の二千人	ほうそうによらい 宝相如来	五十世界微塵数の諸仏如来を供養云々
提婆達多品	だい ぼ だつ た 提婆達多	てんのうによらい 天王如来	無量劫を過ぎて
	八歳の龍女		忽然の間に変じて男子となって菩薩の行を具して云々
勸持品	ま か ほ じゃ ほ だい 摩訶波闍波提比丘尼	いっさいしゅじょう き けんによらい 一切衆生 喜見如来	六万八千の諸仏の法の中に於て大法師となるべし云々
	やしゅ たら 耶輸陀羅比丘尼	ぐ そくせんまんこうそうによらい 具足千万光相如来	百千万億の諸仏の法の中に於て菩薩の行を修し云々

注：「この会に在らざる者」には、二通りあります。

ひとつは、方便品の「五千起去」の人々だと解説されています。釈迦牟尼世尊が舍利弗に向かって説法しようとしたとき、立ち去って行った五千人の弟子たちです。釈迦牟尼世尊の教えを聞きながら、途中で挫折した人々のことと拡大解釈することもできます。

もうひとつは、未来の仏弟子たちです。その意味では、現在、釈迦牟尼世尊の教えを学んでいる私たちも含まれることになります。